まる 3 2019



ツタバウンラン

鎌倉や小路また小路の沈丁花

落椿栗鼠と鵯来て争す

吾が墓のデザインをする日永かな

春雷のとどろく谷戸の栗鼠さわぐ

春寒や時には野良猫に語るなり

病院の窓の夕陽に吾が顔や



絵と俳句・関合正昭

まっ**さ** 三月

春の山 ろ V B 足 を 助 け る 兩 か \mathcal{O} な 喜孝

東京





は

な

うたに上手下手な

し笹子

鳴

は

な

う

た

0)

軍

歌

に

氣

づ

き

0)

山

晚

年

と

V

Z

を

さ

づ

か

り

思

 \mathcal{O}

羽

根

ゐ

れ

ば

ねたでゐ

ねば

ゐ

な

い

で湯豆

腐

に

に

な

るま

0)

小

雨

0)

な

な

め

3,

り

 \mathcal{C}

か

5

な

い

星

もあまた

に

初

ま

ゐ

り

お

5

寒に入る

大人走 吾 子誕生その日を待ちて寒に入 明 来 て のゆらぎを 鶴折る指 くれとせがむ子餅 小正月に 越え が痛み は 忘 れ て 初 を 0) 花 る り り

東京 石森 理和

雑詠

息正 八終 月 つ 間 花 O掛け ら B 微 小さき手 又 7 電 初 音 車 旅 0) バ ラ 跡 射 ス 初 ムネ 四 日 青 か か 0) な 湯 旅 な

_{场玉} 大日向幸江

福の神

き 落 去 女 椿お手玉柳の榊 んとんの照りはなやかにお正 年今年川 優死す 昔 流 Oれ ご と 宿 0) 話 絶えまな 空 の寒 福 に 投 雀 げ く月

東京 七郎衛門吉保

光・ひかり

年 喰 賀へ 積の 0) の に 仕 白き光 信号冴えて 瞳 書初 ひ か \mathcal{O} の 突 る かるぜ 展 や 前 奏 曲 で リー 羹 ひかりをり き刺さる 0) 揃



月

あ 摩 X 号待ちに抱き締めらるるクリスマス 穂女史の 耶夫人もマ め **の** つ 5 あ 茹で菠薐草甘し旨 と 0) IJ は アも貞女 O正 餅 月 む

定梶じょう

び

誕 マ グ 何 あ ア 貧 0) に ち ま れ ど 初 り 茶 礫 日 雪こ 日 房 O口 出 ح 口

東京 須賀

マクロンの東の間の 切 鏡どこか 梅 0) 光の ら見てもグ フランス遠し室の と 光 中 光 を にみそさざ つ め 花 いし ア り

東京 田中

初 二 初 石 参り 満月 霞 天 門 今 れ 0) の 日 松 葉 咲 若 満 原 き < に 光 力 開 に 傳 ップ 光 0) を 冬 射 ら り 房 桜 す



琴あやめ

紫 温冬 苑暖の物 香りを 朝 道 温 に 啄 誇 切 む 0) り る 後 を あ に 寒や \equiv す め風時

^{東京}森 なほ子

初芝居

幼元泥彩 色 日 も は 葱の剥 の 声 けば光れ 張り や 夕 童 忠 上 月 が ぐる の 光 信 る 寒 さ か 初り 宝 芝 初 居めな船

東京 赤座 典子

お正月

つ外 ほろよひの伯父さん初めて読むかるた つ国の 釜や見慣 つがなく雑煮い 土 鍋ふ ニス れ ぬ 五 徳 つも ふ 覗 き 0) つ 込 む ふビ

東京 佐藤 恭子

二日はや

掌 を 器 の や う に 夕 日 か な風光るおいしさうなる草ばかりほのかなるいろにまみえし朝桜枝垂梅なかで遊んで日暮れきて二日はや日をうけとめし莟かな



前月抄

三日はやタヲル のほつれのごときか な 佐 藤

喜

孝

冬 落 暉 を 徐 々 に 吸 込 \emptyset り 赤 座 典

降 り しきる木 O葉 に 猫 O顔 を あ げ 秋 \prod 泉

子

獣 肉 をジ ビ 工 と 食 ベ る 降 誕 祭 大日向幸江

福 島 0) 再 生 ド ラ マ 木 守 柿

内 匠 頭 も 吉 良 ŧ 名 君 冬も み ぢ 篠 田

七郎衛門吉保

純 子

網 結 け ば 電 気 0) 球 O納 屋 に 雪 定梶じょう

仕 舞 け り 須 賀敏 子

祖

母

O

被

布

宝

0)

様

に

月 B 左 手 使 Z 不 自 由 さ 長 崎 桂 子

極

人

0)

2

な

足

早

本

冬

ざ

る

る

田

中

藤

穂

ど こ か で ح つ と 音 森 な ほ 子

寒

林

 \sim

礫

喜孝抄



字空けの俳句の穴へ忘れ花 佐藤

喜孝

或いはどんな花が咲いているのだろうか。(吉保) たであろう昨年は正にこんな年であった。作者はこの句の穴にどんな花が似合うと見たのだろうか。 意の帰り花を見ると、 愛用している産調出版発行「読本・俳句歳時記」(以後「愛用本」と記す)に忘れ花が無く、 旱や台風で樹木に影響があった年に多いといわれている、 とある。 作句され

小春日や横丁のご隠居今何処 森 なほ子

ちました。 て来た時は、 我が家の近所のご隠居さんは、 ふと色々なことが思い出されるのが、 にこにこと三輪車のお相手をされていました。 毎日、 家の前を丁寧に掃いておられました。偶にお孫さんが訪ね 小春日なのですね。 お見かけしなくなってから随分日が経 (典子)

着ぶくれて昔々の石の街 赤座典子

ぬ街を彷徨ってゐる映像が浮かんできた。 読後なぜか松本の零士の 『銀河鉄道999』のアニメで主人公の星野鉄郎が見知らぬ星の見知ら 着ぶくれてに他所者としての旅人の雰囲気が滲み出てゐ

る。 「昔々」も昔噺がはじまるやうで読者を自然に句に誘ってしまふ。 魅力ある句。 (喜孝)

誘はれて酒一升と芋煮会 秋川 泉

と作者もこの口なのだろうか。 ないのだろう。 里芋の出回る頃に芋煮会風のものを作ってみたりするが、自宅の食卓ではおかずの域を出られな やはり河原で焚火で風に吹かれて、そして地元の酒も添えてでないと、 愛用本掲載句に「女にも酒豪が居りて芋煮会」(福島祐峰) (吉保) があった。 美味しい芋煮にはなら もしかする

平野枯る撓な柿はオペラ歌手 石森 理和

と撓な柿とでイメージが重なった。 きな飛躍だった。オペラ歌手、とりわけ女性歌手は総じてふくよかな体躯と丸ぽい顔の組み合わせ、 レンジしている。 以前より、 作者の対象からの発想の飛躍力に驚きを感じていたが、今作は柿からオペラ歌手へ大 (吉保) 飛躍の対象に音楽関連の言葉を取り込むことに、 私も時々チャ

四の市バッグに入れる火消し札 大日向幸江

とか。 火消し札、 小さな札となり縁起物とされました。 調べました。 火事が多い江戸時代の消火の際、 火難災厄を防ぐお守りとして、 火消し組が、 組名を記した札がルー 酉の市に持って行かれ ツ

たのですね。

最近私も「福徳五宝の寶守」というのを頂き大切に持ち歩いております。

手足欠くポンペイの像天高し七郎衛門吉保

された季語と違ひ力強い重みのある季語になった。 その地に立った作者は手足欠くと押さえて述べ、其処で、 押さえた表現が骨太の作品に仕上げた。ポンペイの悲劇的な像をネットで数多見ることは出来る。 季語の働きは不思議だ。 その時体で感じた季語を置かれた。 (喜孝)

枯れ葦にしばし雀の居り無風 篠田 純子

と雀飛び出たり」(北原白秋) とも単にジャングルジムみたいな遊び場なのだろうか。 いるとは。 枯れた葦原には、 (吉保) 葦の種とか葦を棲家とする虫とか、 へとなるのだろう。 作者と白秋が時を経だてて同じような景をみて 暫くすると愛用本掲載句「枯芦やぽつぽつ 雀の餌になるものがあるのだろうか。それ

半鐘は今も高きに山眠る 定梶 じょう

とが出来る。 都会では、 そしてそれは集落の中心部にあるように思われる。 半鐘を見る機会はほとんどなくなってしまったが、 地方に出向くとそれを目にするこ いざ鎌倉の時はそれを打ち鳴らす

ろう。 のだから。無線や放送に主役の座を譲ってはいるが、 (吉保) 無彩色の景観とその存在は変わらないのであ

ご自由に冬瓜一つ持ち帰る 須賀敏子

と隼人瓜を頂いたことがあり、 一度にたくさん獲れる野菜等を、どうぞと言って頂けるのは、とてもラッキーです。 とても新鮮でした。冬瓜にもめぐり会いたいものです。 (典子) 私もゴーヤ

山茶花を椿かと問ふう牛乳屋 田中藤穂

られたり、少し危なそうな人との垣根ごしのやりとり等。 いつも感心しております。(典子) 藤穂さんからは、色々な方と話された様子をよく伺います。 どんな時にも上手に会話をされて流石と、 郵便配達の人にお庭の花や木を褒め

めどり濃くぼっとしてゐる冬木立 長崎 桂子

り濃くぼっとしている」と形容されて切り込んだ作者に敬意を表したい。 る。蕪村や虚子を含めて五十八句が掲載されているが、その全てが落葉樹であった。 愛用本に冬木・冬木立は、 常緑樹にもそれなりの趣があるが、 普通は落葉樹をイメージするとあ (吉保) ここへ

17

石 楠 花 の 花 の 莟 に 冬 の 風 早崎 泰江

どんどん膨らんで行くことでしょう。 の出来ない素直な句を、これからも沢山送って下さい。待っています。 この石楠花の莟は、 ガラスペンの先のような細さだったのでしょうか。冬の風に耐えて、やがて 久しぶりに泰江さんの句、 懐かしかったです。 (典子) 他の人の真似



長崎桂子

窓

切られ、 部と事務所も壊し、 所有地の三分の一を提供する事となり、自宅の一 急に持ち上がり話し合いするの署名の効果なく、 多く埃と事故等での騒音は凄まじく恐怖をも感 勢湾岸道路。 じます。二十年前、 東南の窓からの景色です。 庭石が運び去られるのを見送りました。 国道一号線のバイパスで交通量は 大切にしてきた庭の樹木が 車一台通れる道に此の話が 南北に走る道路は伊



定梶じょう



森 なほ子

片 言 の 子 の 初 夢 を 覗 き た

の夢のなか覗きたし〉。 めり張りがないのです。 正直に思いを述べて良しとすべきかもしれませんが、 あたら勿体ない。結局休止する処が欲しい。 まっ正直に過ぎます。 〈獲枕子

年 詠ずら り 写 真 は 皆 若

休止が入るとは散文から離れる、 切字を遣うか、 この句のように取り合わせることで句中に休止が入ります。 ということ。

19

大根の葉の炒め煮のレシピてふ

と感ずるのは「意外さ」 この句には切字がありませんし取り合わせ句でもない。 そのものではなくレシピであるという。意想外。 があるからなんですね。大根の葉っぱの炒め煮、 なのに佳句である、

田中 藤穂

亡き母が部屋のどこかに霙るる夜

やう霙るる夜〉。 中七「部屋のどこかに」が平凡過ぎないでしょうか。 〈亡き母が部屋にゐる

八見舞ひ出る病院の冬の草

〈見舞ひたる病院出でて冬の草〉。 「人見舞ひ出る」が窮屈な言いよう。動物病院でなかったら「人」も不要ですね。 事実なんでしょうけど「冬の草」が利いてい

ートテックス肌になじまぬ晴続き

L

糸の中に閉じ込める技術を開発した、ということ噂程度に聞いていたのでした。 しかし「ヒートテック」に関して全く知識がなく、 人に尋ねて初めて承知したのでした。 以前に私、 繊維関係の業務についていたことがありまして、 繊維製品卸を生業にする友 東レが、体温を

の意味ですから理由を説明していることになります。詩句に一番の敵は「説明_ でも藤穂さんのお句。晴天が続きあたたかいので肌着がからだになじまない

赤座 典子

物言ひの約め過ぎなり去年今年

0) 句歌でいう「省略し過ぎ」ということでしょうか。年の移り変りの速さに自分 「物言ひ」は言葉遣いのことで、 (あるいは誰でも宜しいのでしようが)もの言いの 相撲でいう「物言い」ではない。ですから 「約め過ぎ」に改めてこ

ころ付く。このくらい離れた取り合わせだからこそ佳句になった。

ゼッケンのわらわら下る深雪晴

まいて下り坂とあればなおさら。 スタートしてそう時間がたっていない。「ゼッケンのわらわら」が上手な形容。

寒満月鴇色の失せ澄み切れり

色を変えていく。 満月は確かに上り始めは赤みを帯びてますね。 よく見ているわけです。 その月が高くなるにつれその

大日向幸江

同じ夢語りし友や初電話

より〉。 「同じ夢」 がよくある言辞、 「同じ」はなくもがな。 へ初電話夢を語りし友垣

輝かし家族写真の年賀状

はまさに「輝かし」です。 現代の葉書は安直にカラー印刷ができますから、 仰有る通り。 あの類の写真

がに花びら浮ぶ女正月

とつ。 た、という。何の花びらだったのでしょう。桜?それを言わないのも修辞のひ 一説に、女性にとり家事で忙しい所謂「男正月」が過ぎて女だけの新年を祝っ

七郎衛門吉保

誰も彼もダウンで混み合ふ初電車

初電車〉。 「誰も彼も」、「ダウンで」に説明臭があります。〈ダウン着て混み合ひにけり

野仏にダウン着せたし霏霏の雪

えない。 坐 五 「霏霏の雪」。 〈野仏にダウン着せたし霏霏と雪〉。 「霏霏」はタリ活用の形容動詞ですから「霏霏の」とは遣

寒紅に負けぬ赤色ダウンかな

せんが。 まずい。 俳句のことば遣いとして「寒紅」と「赤色」を並べて使用するのはやっぱり 〈寒紅に負けない色のダウンかな〉。吉保さん、 口語を嫌うかもしれま

石森 理和

寒の餅黍と決めをり嬉しい黄

「嬉しい黄」が上手。愚母も寒には必ず黍餅を作ったものでした。

掲き立ての餅は赤子を抱くやうに

です。 ましたが、赤子を餅に見立てても面白い。季感は弱くなりますが。〈掲き立て の餅を抱くやう赤子かな〉。 助詞の「に」「を」「も」などは、 〈掲き立ての餅は赤子を抱くやう〉。 もし省略し得るなら省略した方が宜しいの 因みに理和さん、 餅を赤子に見立て

梅の秘めたる想ひ香に伝ふ

香りは花の秘めたる想いだという。なる程だからあんなに匂うわけですね。

秋川 泉

ぽっかりと寒満月の今生まる

るよりも「寒の満月」と措いた方が落ち着くかと思いますが。 の満月今生まる) 「ぽっかりと」が凡のようで平凡ではない言いよう。ただ、「寒満月の」とす へぽっかりと寒

ぬっと出し寒満月に声を上げ

月ぬっと出づ〉。 月の出に作者が声を上げるのは凡。 月が声を上げた方が。 〈声上げて寒の満

転びけり寒満月を称へゐて

「転ぶ」がやや大仰。〈つまづけり寒の満月称へゐて〉。

長崎 桂子

はや三日月鈴鹿颪に向かふ帰路

桂子さん、四日市のお住まい。だからこそ「帰路」 の語が活きてゐるのです。

退職し生き甲斐の話事始

遣った句を投稿。 当時四○歳になってたでしょうか。勤務先を変えたために「退職」 「生き甲斐の話」とありますので定年退職なんでしょうね。 とり上げてくれたのはいいが縷々、老年だの老い先だののこ かつて私の友人、 のことぱを

のように何かにとりかかって生きがいとする。 句は「事始」ですから中七の措辞によく響きあっています。 とばを使って鑑賞されてゐて、 困惑した、 ということがありました。桂子さん 定年後でも「事始」

燦燦と五体を包む福茶かな

ように休止が欲しいのです。 みですけれど、 すけれど、もし誇張ならこのくらい誇張して初めて俳句になるのです。私の好 福茶を私味わったことありませんので、 〈燦燦と五体を包み福茶かな〉、 お句が誇張なのか否か分らない。 〈燦燦と五体包めり大福茶〉 で

篠田 純子

地下駐車場は薄き瓦斯室人日なる

その瓦斯の濃度が薄い?あるいは明度のこと?いま一つわかりません。 地下駐車場にナチスの瓦斯室をイメージしているのでしょうか。「薄き」は

監視カメラの死角地を歩く鴨

くなるのです。 鴨監視カメラの死角かな〉に直したら純子さんにはまどやかな直しようではな にするわけで、 のでしょうね。 「死角地」とは言わない筈ですので、「死角」で切れて「地を歩く鴨」と続く 純子さんの好みでは十語七語の句になる。でも例えば、 面白い取り合わせ。破調の句は、 その方が面白くなるから破調

体育坐りのだいだらぼっち山眠る

なたには関東の山々が。 おもしろい。体育坐りをした「だいだらぼつち」 の痕跡は湖か潟か。 遥かか

須賀 敏子

伴走者紐新しや走り初め

もしかしたらパラリンピツクを目指して。

晴や見事に続く飛行機雲

寒

ずですけど、 「見事に」 の措辞がみごと。 だからこそ貴重。 寒晴の飛行機雲は夏季よりかかる時間が短いは

佐藤 喜孝

チンをして雑煎をたべて晝寢して

ひとり暮しのお正月。

電報は戸をたたくもの夜の雪

時の挨拶。電報がもっとも早くて確実な唯一の連絡法だったのです。 電話が普及するまでは全て電報でした。「とうとう電報が来た」というのが当 るわけですけど、 一年、二年乗船して三か月あるいは半年休暇をとる、そんなサイクルで勤務す 私の住まう処は、外国航路の船員が圧倒的に多い地方でした。彼らは例えば、 いよいよ公暇が終了して船会杜からの乗船命令が来るのは、

口は渡るさきざきにある冬の花

蝋梅もその中に入るでしょうか。いずれにしても牡丹のような原色調のものは と「咲く」の撞着を嫌ってのこの語の使用ではないでしょう。冬の花らしい形 少ない。それが太陽の移動の先々に「咲く」のではなく「ある」のです。「花」 「冬の花」。 読みつぐにつれ味わいの深まる句です。 固有の植物はないようですので、茶の花、あるいは山茶花、侘助、



----- 須賀敏子

窓

道博物館」の駅も近い。

この家の東窓からは常に新幹線の上り下りが止むこと

この家の東窓からは常に新幹線の上り下りが止むこと
駐車場があり、その先は中山道。そして新幹線の高架が。

から見える夜の新幹線の窓明かりは旅心をそそられる。猫の「きなこ」はつれないが、この家が好きだ。東窓

30

俳句の尾鰭

定梶じょう

風鈴を吊り替ふ東京物語 中川句寿夫

句寿夫さんは、ともかく俳句感のいい人でした。 の句は『雲母』参加当時の作品だが、「東京物語」 が実は何であるかを知らないで取り入れて、そしてが実は何であるかを知らないで取り入れて、そして

かりがねやずしりと二十四万語

辞書出版の世界で鎬を削る「辞苑」「辞泉」「辞林」

なった折りの句。に到達した。そんな新版が刊行されたことが話題にの三書のうち広辞苑が、初めて、二十四万語の収録

これも感でしょう。

践すること難しい。だから面白い、とも言えますが。しあしに左右されることみんな知っていて扨て、実何によらずそうなのですが、文芸でもこの感の良

秋燕動か 父看取る更に遠くの夕蛙ただよへるもの白壁の今年竹 新涼の群を離れて真鯉 竹林に入りて 鶯が鳴く縹渺として数へ年 あたたかき十 この芽が 川自足の X ほぐ 山 日を縦横に 母に音立てて 万の目しじみ蝶 るる童話読むやうに 一月の爪を切る かな

あをキ ワ ド俳句辞典(はこー はし

マーマルソスラを立れ ハン運ぶ大き盆がの旅立ちぬがたせて運ぶクー

赤大須佐森長斉森佐芝鈴早鎌早石赤篠渡鈴佐座日賀藤山崎藤山藤 木崎倉崎森座田邉木藤向のの 多喜 多典幸敏喜り桂裕り喜尚枝泰久泰理典純友枝喜子江子孝こ子子こ孝子子江恵江和子子七子孝

銀杏落葉バザー

賑はふニコライ堂

黒澤

佳子

ゆき

恭子

鈴堀早関 木内崎口

多

純裕枝一泰子子郎江

篠斉 田藤

此処彼処羽衣掛かる山法師羽衣のやうな五歳の更衣鶴岡で羽衣の能あはあはと鶴岡で羽衣の能あはあはと

七郎佐佐芝松鎌衛藤 本倉喜

を観んとて出づる寒の

聝

電やビルのはざまに突きささる
、大工呼吸ビルのはざまに変きでは変生が、大工呼吸ビルのはざまに夏の雲
、大工呼吸ビルのはざまに原の雲

鋏

春の宵和鋏に鈴つけてみるだめられていける我鬼忌つかひて鋏切れぬかける我鬼忌つかひて鋏切れぬかが袋に花鋏置き日の短かで鋏にで鋏置き日の短かがないがです。

竹田定森赤佐内中梶山座藤 0) よう 弘藤子穂 りこ 典 恭 子子

鈴木多

か な

黒佐澤藤 篠田

冬曜の分にを開める。

イ

芝堀篠佐内田藤

佳恭純尚一純喜 子子子子郎子孝

シャキシャキー

ヤキ

水切る花鋏

赤定佐石竹佐芝座梶藤森内藤

よ喜理弘恭尚 う孝和子子子

よ夏ひく草と 切に

れる鋏にためら

いきそぞろ寒 とのなき鋏 なたんに鋏入れ

との

0)

鋏の

冬晴の鋏

の刃先開かりき鋏の-

鋏

典子

佐後石早後藤藤森崎藤 恭志理泰志子づ和江づ

日の中を反嘴鴫はとほりぬく朝焼や鴉そろひて嘴を研ぐ嘴でもぐ落ちる枇杷あり鴉の日鵯の嘴かたむけて散る椿御慶のぶ鴉は黒き嘴をもて

É

男仰臥

をんなうつ伏せ春婆娑羅

堀内

千代紙の鶴の箸置年用意
著がささるまで鼻唄の蕪蒸
教の昼布巾の下の箸茶碗
秋の昼布巾の下の箸茶碗
素凝のどこから箸をつけやうか
著洗ふ音の清しさお元日
新蕎麦に一箸一点山葵添え
新蕎麦に一箸一点山葵添え

芝石関栢河栢佐佐芝 森口森合森藤藤 尚理ゆ定笑定喜子和き男子男孝 恭尚 子子 田盛にみかんをゆらす鵯の嘴と嘴ざわめき起る夏木立っ声の鋭し鷭の紅き嘴鵯の嘴みかんの汁の光りをり鵯の嘴みかんの汁の光りをりったる。 「ないって浮寝鴨で水や嘴太鴉隣に来生るる折鶴の嘴がの大の背がでよりをりでは、 をざるる折鶴の嘴折りてよりをする。 をざるる折鶴の嘴折りてよりをする。 をざるるがはしてゐる鯔の群と出くはしてゐる鯔の群と出くはしてゐるがない。 「はいた」という。 「はいた」といる。 「はいた」という。 「はいた」という、 「はいた」といった。 「はいた」という、 「はいた」といった。 「はいた」という、 「はいた」というない。 「はいた」というない。 「はいた」というない。 「はいた」というない。 「はいた」というない。 「はいた」というない。 「はいた」といった。 「はいた」というない。 「はいた」というない。 「はいた」というない。 「はいた」といった。 「はいた」といった。 「はいた」というない。 「はいた」といった。 「はいた」といった。 「はいた」といった。 「はいた」といった。 「はいた」といった。 「はいた」といった。 「はいた」といった。 「はいた」といった。 「はいた」といった。 「はいた。 「はいた」といった。 「はいた。 「はいた。 「はいた。 「はいた。 「はいた。 「はいた。 「はいた。 赤篠赤定石石早赤石篠竹佐早座田座梶森森崎座森田内藤崎 よ理理泰典理純弘恭泰 う和和江子和子子子江

典純典子子子

33

あとがき

はしたて集のこと

します。 月といふすこし気ぜはしいが会員の皆様よろしくお願ひ しばらく私と二人で受け持つことにさせていただく。 にいそしんできた。この欄を定梶じょうさんの力を借り 「あを」は会員誌。をりをりに先達を立て俳句の研鑽

御厚志多謝

藤穂様 夏子様

石森 理和様

短文のお願ひ

させていただきます。 が小さいのと短文過ぎるのとで廃止、以後用紙は自由と 投句欄に併設して短文用の原稿鱒を付けましたが、枡

のを止めました。 ませんでした。ほかの歳時記も同じようなことと調べる (産調出版)・「十七季(三省堂)全て採りあげられて居 べてみました。「季寄せ」(山本健吉)・「読本俳句歳時記」 かとふとおもひました。銀世界が公認?の季語なのか調 す。「ドア開けるあたりいちめんぎん世界」の季語は何 りになるのではと思ひます。そのことが今回のテーマで ました。きっとご子息やお孫さんの作られた俳句のお有 「前月抄」のカットに授業で作ったといふ俳句を載せ

YAHOO知恵袋に以下の質問と答をみつけました。

銀世界って言葉は冬の季語ですか?

うか?そもそも「季語」とは、季節を感じさせる事が出来 界』の持つ美しい響き、さて、どちらが人の心を打つでしょ まで居なかっただけの事であり、だからこそ、本には載っ 惜し過ぎると思います。〈以下略〉 められた『枠』に捕われて諦めるにはあまりにも惜しい すばらしい発想です。こんな手垢にまみれた言葉と『銀世 す。「銀世界」... このような美しい言葉を思いつく人間が今 てはいないのです。『雪』『冬』等の手垢にまみれていない [編集]質問者様にはたいへん優れた感性が見受けられま それで十分なのです。このように優れた感性を、

子供の世界は毎日が発見ですね。(喜孝)

印刷・製本・レイアウト カット/須賀忠男・福井美佐子・ティリ

ゆうちょ銀行(普)(店番 018) 会費 一〇〇〇〇E 佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ) 4 5 8 6 4 0 2